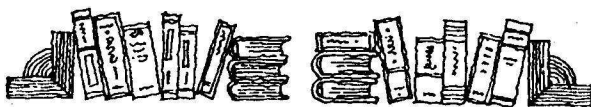


国語国文学会だより



No. 36

2007. 5

日本文学科卒業生の会

国語国文学会

平成十八年度秋季大会

研究発表・公開講演会 報告

平成十八年度秋季大会を十一月十八日(土)、百年館低層棟五階五〇四教室および成瀬記念講堂にて開催しました。

◆午前の部(研究発表)

百年館低層棟 五階五〇四教室 十時〜十二時
報告「インドにおける日本文学をめぐる現況」
本学博士課程前期一年 スウィーティ・グプタ氏

中勘助『菩提樹の陰』とインド戯曲『シャクンタラー』——神罰と愛の再生をめぐる物語造型
本学博士課程後期一年 木内英実氏

「変化」の明石君と女身の菩薩が法師を導く話
本学博士課程後期二年 森田直美氏

◆午後の部(講演会)

成瀬記念講堂 十三時三十分〜十六時三十分
日本語教育はおもしろい

私の創作ノートより
本学教授 江田すみれ先生

懇親会 十六時四十五分〜十八時十五分
作家 平岩弓枝氏

於ウイミン

○例年、公開講演会の講演要旨をお届けしている春の「たより」ですが、今回は趣向を変えて、参加者のレポートという形にいたしました。

平岩弓枝氏

「私の創作ノートより」をお聞きして

斉藤 令子(新6回)

成瀬記念講堂での生涯学習総合センター(LCC)と共催の公開講演会。登壇された平岩弓枝氏は、まず成瀬仁蔵像に頭を下げられ、演壇に向かわれ、「席をつめてお座りください」、はつとする第一声であった。

講演は、平成十七年十二月十四日から毎日新聞朝刊に連載中の『西遊記』についての「創作ノート」。

仏の教えを求めて国禁を破りインドへ渡った玄奘をモデルに、神話化され英雄化された「西遊記」の成立と、江戸時代には戯曲化され、孫悟空が立役としてもはやされ、三蔵は二枚目、八戒、沙悟浄は三枚目としてパターン化されていたこと。

今回、執筆に当たって心がけたことは、「現存する西遊記を尊重しつつも、私流の小説の進め方をする・どんな人物像を描くか、自分の考えを読者に訴える」ことだったという。

そのために、三蔵法師の育ち、環境、受けた教育、基盤をつかみデータを作る。三蔵は宰相の娘を母に、役人を父とするが、胎内にある時、任地に父母が赴く際に事件が起こり、父が殺害され、母はその殺人者の妻に強要され、三蔵を出産。母は後の証しに赤子の足の小指をかみ切り、いかににくくりつけて河に流し、その命を守る。

孫悟空は石から生まれた親なし猿、天界で暴れて五行山に閉じ込められるが、三蔵の弟子になることで救われる。八戒は天の河の軍の長であった

が追放された要領のよい見栄っぱり。沙悟浄は貧しい漁夫の子。働き者で天界に呼ばれるが失敗をしかし追放された愚直、素朴な人柄。この三人が弟子となる。

地上界、死を司どる幽冥界、天帝を頂く天上界、神々、そこに従う役人たち。西方の極楽世界におわす釈迦如来、悟空を愛する山神。様々な世界と人物が描かれる中、唐の国から天竺へ、教典を求めて旅を続ける三蔵法師と三人の弟子。

次々襲う妖怪と奇想天外な仙術を駆使して闘いつつ、喧嘩や誤解を経てお互いの心が通い合うようになる過程や、天界の助けを仰ぎつつ遙かな旅を続ける一行の様子を、エピソードを描きつつ、彼等の成長の跡を無理なく書き込んでいきたい。そのために、キャラクターや事件も少し変えている。

講演の中では、氏の文学上の師・長谷川伸との日々にも触れられ、「弟子と共に師も学ぶ——と言われたことが忘れられない」と語られたが、その師への思いが一人の師と三人の弟子の成長の日々にも、投影されているのかもしれない。

新聞小説には原則として毎日さし絵がつく。その挿画の蓬田やすひろ氏にもふれ、

「かわいい孫悟空を描いてくださるが、最初の悟空は生まれたままの姿だった。三蔵からのお下りの服をつけていたが、それがあつた時、そろそろ悟空に彼に合う服を着せてはどうでしょう、という提案が蓬田氏からあり、服を着せた。しばらくすると今度は、靴を履かせては、と言われた。その愛情が嬉しく、原作にはないそのシーンを書き

込んだ。私の悟空への愛情と重なり合い、悟空の成長に添うように衣服が改められ、裸足の足に靴を——と物語が広がった」

と、画家との二人三脚ぶりを紹介された。

また、新しい発想として、天界から逃げ出した鯉の妖怪、靈感大王を女性としたことも明かされた。毎年村の子供たちを生け贄として差し出させていた大王だが、実は天界の池があふれ地上に流れた子や、その子を探しに出かけた夫が村人に釣り上げられ食べられたことへの敵討ち。生け贄の子供たちは河底に閉じ込めはしたが殺さず、その子供たちのために女鯉は食料を求めて苦労しているが、「子どもを殺すことは出来ない。妖怪も母親だから——」と結ばれた。その言葉が私には、氏の深い慨嘆であり、痛切な現代への警鐘であるように思われた。

幼い頃寝物語に聞き、長じてから読みふけたという西遊記を現代風に、人間味豊かに描く氏の「創作ノート——その過程、秘話——を伺う貴重なひとときだった。多くの会員に、そして学生会員に、聞いていただきたかったと、痛感した。

それにしても、事前の会員への働きかけ、当日の参加者の迎え入れ、書籍の販売、会場の整理など、反省することの多い大会でもあった。昭和六二年、拡大国語国文学会準備総会の講演も平岩弓枝氏、会場も成瀬記念講堂であった。あの時の緊張感、準備の日々を思い起こしていた。

なお、平岩弓枝氏の『西遊記』は前巻が毎日新聞社から三月に発行され、下巻は今夏発行の予定、とのことである。

日本語教育はおもしろい

日本文学科 江田すみれ

1 日本語教育をとりまく状況

日本語についての一般的な教養書として多くの人に読まれている岩波新書『日本語』（1988）で金田一春彦は、日本語の特色は何かという問題を提起し、敬語や男性語女性語の違いがあることをあげる人がいるが、それらは世界のあちこちの言語にあることであるとし、国内にいる人は日本語だけ話し、海外ではその日本語がほとんど通じないという点が特色であろうと述べました。それから20年、今ではいぶん状況が変わってきました。

はじめに日本国内の日本語教育をとりまく状況を簡単に見てみましょう。

第一に、多くの外国籍の人が日本にいるようになりました。90年には108万人程度だった外国の人が、2003年の統計によると200万人近くに増え（1）、東京都で見ると、港区・新宿区では区民に占める外国人の割合が10%ほどになっています。

第二に、それらの外国籍の人たちが比較的長期にわたって日本にいるようになっています。例えば愛知県豊田市のある小学校では、全校児童数206名中外国人児童が72名おり、保護者対

象の調査によると、来日後11年以上の家庭が半数を越え、6年以上の家庭は83%にのぼるといふ報告が出されています(2)。このように外国籍の人が長期間滞在する地域が日本のあちこちにできつつあります。

そして、日本にいる外国人が多様化している点もあげられます。以前は留学生、日本語学校で学ぶ学生が多かったですが、現在は労働者、その子ども達、日本人の配偶者、研修生、中国からの帰国者などいろいろな状況の人が日本にいます。

将来のことでは、少子高齢化への対応として、外国から働き手を導入しようという議論もなされています。実験的に、フィリピン人の看護士がごく近い将来日本で働き始めます。

海外では、2003年、世界で日本語を学ぶ人は235万人を越えたそうです(3)。そして、外国の学習者のうち3分の2を学校教育で選択外国語として学ぶ小学生・中学生・高校生が占めています。私達が子供のころ、どうして自分は英語を学ぶのかわからないまま授業を受けていたのと同じように、オーストラリアの小学生が、タイの中学生が日本語を学んでいます。

2 日本語教育は何を教えるのか

では、日本語教育はどんなことをしているのでしょうか。

私たちは中学・高校で英語を勉強してきましたが、どうも話せないというコンプレックスをもっている人が多いようです。これに対して、日本語

教育は、特に国内では徹底して話させる教育をしています。通常日本の日本語のクラスではいくつかの国の学生が混在しますので、一つの言語例えば英語などを使つた場合は、その言語があまり得意ではない学生が不満を持ちます。そこで、多くの場合、日本語の授業は最初の1時間目から教師は日本語を主体にして授業をし、学習者に日本語を話させます。この、「学習者に話させる」ということのために、日本語教師はさまざまな工夫をして授業を組み立てます。

学習者に話させた場合、出てきた文の中に、発音、文字、語彙、文法、コミュニケーションの方法などいろいろな問題が表れます。教師はそれらを直しますが、その際、学習者から「どうしてこちららだめでこちららいいのか」と質問されます。それらに答えるのも日本語教育の大切な仕事です。

例えば、留学生が招待状を持って来て「先生、私の結婚式に出席していただけないんでしょうか」と聞いたとします。これは、「結婚式に出席してください」と言いたかつたのでしょうか。では、どうしてここで「んです」が入っているといけなんでしょうか。

日本語教育ではこういう国語辞典にのらない項目をあげた辞書があります。そのひとつで「のだ」をひいて見ると、

- (1) 説明を求める「どうして遅れたんですか」
- (2) 主張「それでも私は行きたいんだ」
- (3) 納得「変な男がうろうろしていた。だから

犬がほえたんだ」
(4) 言い換え「彼女は人の物を欲しがる。要するに彼女は子どもなんだ」

のような説明が載っています(4)。「のだ」を使うには、文脈、発言などで、ある状況が前もって存在することが前提となります。上の例で見ると、先生が出席しないと答えたという前提があれば、その説明を求める発言となり、正しいと認められます。しかし、ただ招待状を持ってきた段階で「のだ」を使うと、「先生」が無言で出席拒否の姿勢を見せたという意味になりおかしいことになってしまいます。このように、日本語教育では、私たちが昔中学校で習った学校文法とは違う文法を使わなければなりません。

コミュニケーションの方法でも外国の人と日本人の違いがあります。例えば謝罪の方法を例に挙げると、日本の人が使う方策では「前触れ(実は...)、責任の承認(ほんと、悪いと思うんだけど)、謝罪(ごめんね、すみません)、埋め合わせ(新しいの買つて返すから)」などがあげられます。これに対して例えば中国語母語話者が使う謝罪の方策としては「自己弁護による事情説明(わたくしが悪いわけではない)、人間関係への言及(昔からの友達じゃない)」などがあります(5)。

互いの違いを理解しないままコミュニケーションすると誤解が生じ、それが重なれば両者の関係は悪くなり、おつきあひしなくなってしまう。日本語教育をする場合、摩擦がおきやすい場面について十分な観察をし、日本と学習者の文化の

コミュニケーションの仕方の違いを整理して、どのようにすれば誤解がないスムーズなコミュニケーションができるかを伝える必要があります。教室で教える関係上、学習者に日本のやり方を伝えることが多いのですが、本当は日本人にも外国人のコミュニケーションの仕方を伝える必要があるわけです。その場合、難しいですが、日本の文化だけがいいという自文化中心主義にならないよう気をつけなければなりません。文化を相対的に見るのが大切です。

3 日本語教育はおもしろい

多くの日本人が日本語は難しい言語だと思っています。しかし、それは間違いです。日本語は発音が単純です。名詞の男性女性の違いもないし、動詞の活用も規則的です。助詞が難しいと言われるますが、助詞を間違えたり抜かしたりしてもコミュニケーションは成立します。書き言葉は漢字の負担が大きいです。話し言葉はやさしいです。文化の違いは世界中どの文化でも起こることです。外国人の日本語の使い方を見ていると時々興味深い現象に出会います。みなさんも近くにいたる外国の人と日本語で話し、「日本語・日本語教育はおもしろい」と体験しませんか。

注

- (1) 田尻英三他 (2004) p36
- (2) 伊藤哲也他 (2006) p196
- (3) http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/1.html
- (4) 市川保子 (2005) pp149-151

(5) ボイクマン総子 (2006)
参考文献

(1) 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

(2) 伊藤哲也他 (2006) 「外国人児童の現状と教育現場の対応について―外国人集住地域における児童と保護者の実態調査から」『移動する子どもたち』の言語教育―ESLとJSLの教育実践から『年少者言語教育国際研究集会実行委員会

(3) 金田一春彦 (1988) 『日本語』岩波書店

(4) 田尻英三他 (2004) 『外国人の定住と日本語教育』ひつじ書房

(6) ボイクマン総子 (2006) 「会話における「聞くこと」と「話すこと」とは―OPtを活かした教室活動の提案」『南山日本語教育シンポジウム』関西OPt研究会

△報告▽文学散歩

岡本かの子ゆかりの地 多摩川沿いをめぐる

土橋ユリヨ

平成十八年十月十四日(土)、JR南部線津田山駅に集合した参加者は、児玉久美子さん(旧46)がお住まいの、チャーミングコート溝の口を訪れました。

そこで昼食をいただき、藤木直実さん(院31)、大学院生の近藤華子さんから、岡本かの子の生涯、夫である岡本一平をからめてかの子についてのお話を伺いました。

藤木さん、近藤さんの作成された資料を使いな

がらの説明は、大変わかりやすく、かの子という人物を理解するのに役立ちました。

そのお話をふまえた上で、今度はバスで、川崎市民ミュージアムに向かいました。そこには、かの子の直筆の原稿など、貴重な資料が収蔵されています。それらの資料を見せていただきながら、藤木さん、近藤さんから、かの子の文学についてのお話を伺いました。実際に直筆の文字などを見ると、かの子の人物などがわかるような気がしました。

その他の展示を見た後、またバスに乗り、かの子と一平が結婚前によく訪れたという、二子神社に行きました。車の往来も激しく、当時の面影を偲ぶことはできませんでしたが、そこには、かの子と一平の息子である岡本太郎によって作られた文学碑「誇り」がありました。ふたりの才能は、たしかに息子の太郎に受け継がれていると感じました。当日はお天気にも恵まれ、大変楽しく、また充実した一日を過ごすことができました。

最後に、有意義なお話を聞かせてくださいました、藤木直実さん、近藤華子さんに深くお礼を申し上げます。

二〇〇七年五月一日

発行・日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会
〒112-8681
東京都文京区目白台二一八一
日本女子大学 日本文学科内